沖縄県立 博物館だより 1991.9 No.31

イリオモテヤマネコ 故里へ帰る！ 第15回移動博物館成況におわる

第15回目の移動博物館は、6月7日(金)・8日(土)の両日、竹富町西表島の大原離島総合センターで開催されました。

内容は、〈収蔵品の展示〉〈文化講座の開講〉〈ビデオの放映〉。収蔵品の展示は、考古、歴史、自然、美術工芸、民俗の5分野にまたがっています。今回は、西表島出土の考古遺物、西表島関係古文書、西表関係資料、イリオモテヤマネコ（剝製)、西表の節祭関係資料等、西表島関係の資料が紹介されました。地域の自然と文化を理解し、認識を深めるのに大いに役立ったようです。

文化講座は、7日午後7時から上原小学校体育館で開催され、沖縄県立芸術大学附属研究所の波照間永吉助教授が「八重山のうた」と題して講演しました。

期間中、竹富町のほとんどの小・中学生が観覧しました。参観者数944名。

夏休み

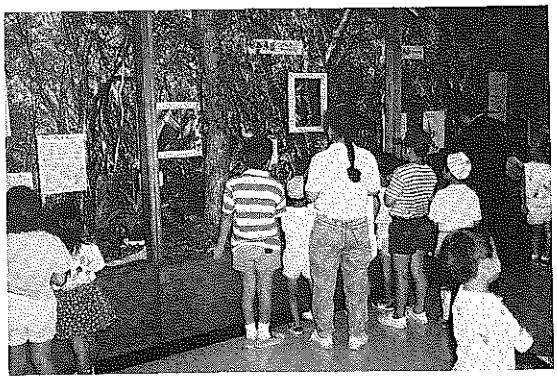
子どもたちでいっぱい！ 企画展 沖縄のチョウ展

写真でみる

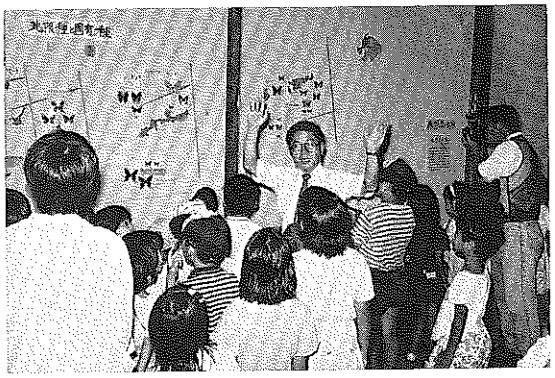
8月1日から9月1日まで行われました沖縄のチョウ展は、1日平均717名、総入館者数19,372名の参観者で賑わいました。とくに夏休みとあって親子づれがめだちました。子どもたちには自由研究の題材さがしにもおおいに役立ったようです。展示は、標本個体数1200点、写真パネル61点、チョウと人間生活に関する資料40点、児童生徒のチョウの研究二題、顕微鏡5台（鱗粉の観察）を駆使して沖縄のチョウを紹介しました。参観者のほとんどが、沖縄県にこんなに多くのチョウがいることに感激していました。

テープカット・8／1㈱AMIO：00与儀児童育成クラブの生徒たち50名の参加で、にぎやかに行われたテープカット。

テープカットが終ったあと、長嶺邦雄先生、後藤光男先生、新城安哲先生によって展示説明会が行なわれました。



身を守る工夫・擬態のコーナーでは、羽を閉じたコノハチョウにびっくり！



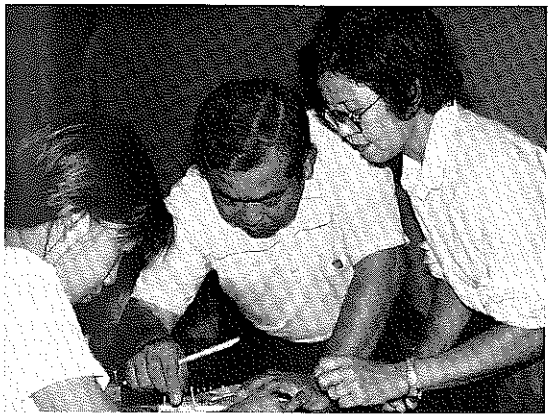
蝶・ミクロの世界
顕微鏡にむらがる子どもたち。

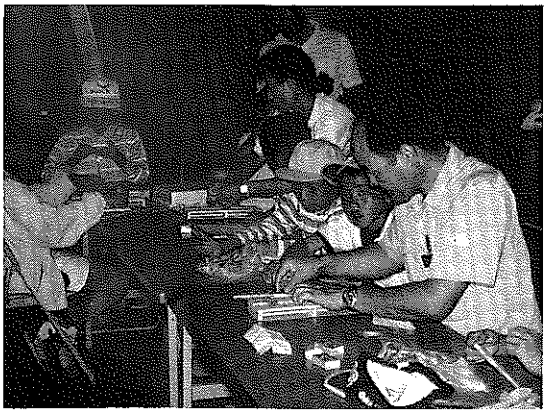
第204回 博物館文化講座

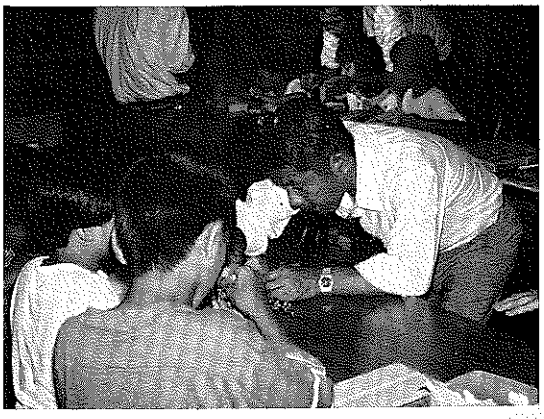
チョウチョと遊ぼう！

チョウをおいかけ 標本づくりにがんばった

夏休みは、子どもたちにとって自然体験をする絶好の機会です。当館では、8月4日(日)チョウの採集会と標本づくりを行ないました。採集会は、早朝8時半から11時半まで末吉森で行いました。あいにく台風9号のあとでチョウも少なく、採集にはいまひとつでした。それでも親子でがんばって、リュウキュウアサギマダラやイシガケチョウなどを採集することができました。午後は博物館で採集したチョウの標本づくりにがんばりました。採集や標本づくりの指導には、長嶺邦雄先生、後藤光男先生、新城安哲先生にがんばっていただきました。







展示会のおしらせ

企画展　壺屋の陶工遺作展

会期：1991年9月17日(火)～10月6日(日)　　会場：2階企画展示室

この展示会は、壺屋に生まれ壺屋で活躍した陶工のうち、物故者に焦点をあてて彼等の作品を通して壺屋陶芸の脈絡や動向を探究するとともに沖縄陶芸のすばらしさを紹介するものです。

出品者は16名の陶工の作品で構成します。16名の陶工は、それぞれ何らかの形で結びついています。しかし、作品をみると、それぞれに陶工の性格が滲み出ており、個性豊かな作品といえるでしょう。

特別展　アジアの祭りと芸能 ー仮面と音楽ー

会期：1991年10月15日(火)～12月1日(日)　　会場：1階歴史室、2階企画展示室、美術工芸室

仮面や楽器には、自然やそれをつかさどる神を敬い祈り、活力や安寧を祝い喜ぶ、人間の共通した心と造形美が表れています。

この特別展では、本県を含めた南西諸島、本土、東アジア、東南アジア、南アジア・北アジアの祭りや芸能に登場する仮面や芸能用具、楽器等約400点をとりあげて、それぞれのお国柄を生き生きと展覧します。

関連行事として、文化講演会、仮面芸能の公演会、仮面製作の実演等も予定しています。

どうぞ、ご期待ください！

いよいよスタート 博物館新館建設委員会

県立博物館新館建設委員会が9月1日に発足、いよいよ西暦2000年の開館をめざして、新館建設の具体的作業が始動した。新館建設委員会は、昨年度の建設検討委員会の答申、「沖縄県立博物館基本構想」を受け、これに基いて基本計画を策定するために設置されたもので、平成5年度までに基本計画を作成し、以後、展示委員会、資料調査委員会等にバトンタッチして平成11年度までには新館を完成させる予定である。新館は那覇新都心地区に立地し、規模は現在のおよそ4倍におよぶ施設が構想されている。その実現のためにも、まず新館建設委員会においてしっかりした基本計画ができあがることが期待される。

委員には学識経験者及び行政経験者の中から次の諸氏が委嘱された。

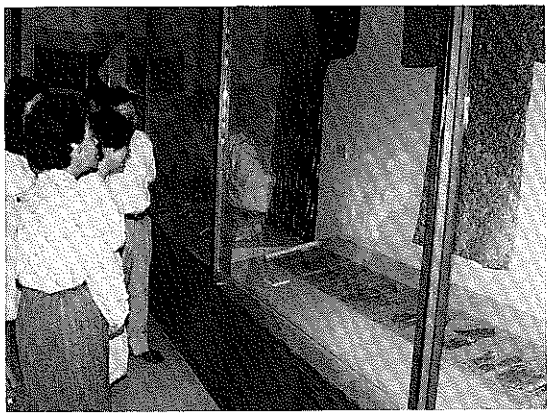
鈴木雅夫（琉大教授）、福島駿介（琉大教授）、大村重信（県建築士会会長）、屋田直勝（県立博物館協議会委員）、池田栄史（琉大助教授）、渡名喜明（琉大助教授）、土屋誠（琉大教授）、比嘉政夫（琉大教授）、仲地哲夫（沖国大教授）、安村哲三（県総務部次長）、仲田秋一（県振興開発室次長）、渡嘉敷勇（県土木建設部次長）、嘉手納是敏（那覇市教育長）、長嶺義光（県教育次長）。

どうもありがとう！ 新収蔵品展おわる

当館では、毎年、前年度に寄贈を受けたり、収集、購入を通して得た資料を広く一般に公開する目的で〝新収蔵品展〟が開かれています。

昨年度も、多くの皆様から、貴重な資料を寄贈していただき、そのお礼の意味も兼ねての展示会が去る5月14日㈫～5月26日㈰まで開催されました。

寄贈品では、神奈川県在住の安居清道氏から「江戸上り行列図」、ニール・R・ウエスターデール氏から『日本遠征記（1856年・初版本）、崎山進氏からタガヤサンミナシ、大村徳幸、照屋寛輝、宮平トシの三氏から建造物の古材や礎石などが展示されました。また、購入資料では、朱漆



沈金山水人物食籠・藍染ムルドウッチリ上衣などの美術工芸資料、『琉球和解宋名臣録』などの歴史資料も、この他、県庁舎建設局から移管された武徳殿の模型も公開されました。

〈展示解説シリーズ〉

歴史展示室をみよう

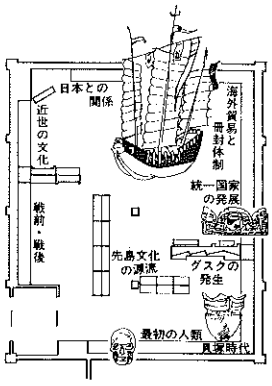
―琉球史へのいざない①―

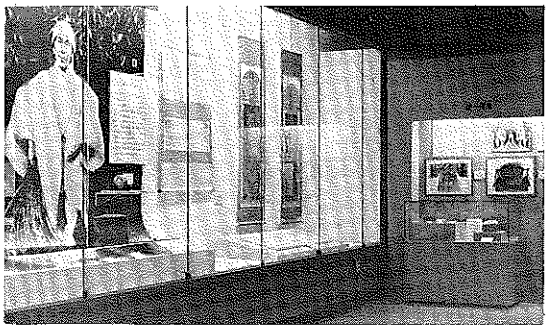
歴史展示室は旧石器時代から現代の沖縄までの歴史をみてとれるように展示してあります。

15世紀の前半に三山が統一されて琉球王国が誕生しました。このコーナーの展示には冠やかんざしがあります。尚真王の代には身分制度が整えられたといいますが、冠やかんざしの色、金銀の区別により役人の身分を明らかにしたものです。また、役人や神女のノロに辞令書が与えられたことは政治や神女の仕組みが整えられたことを示しています。

14～16世紀の琉球は「大交易の時代」でもありました。中国や日本、東南アジアの国々とさかんに中継貿易をおこなっています。ロビー展示の「万国津梁の鐘」にきざまれた文は海外との交易が活発だったことをあらわしています。展示室には中国へ渡った進貢船の絵画や模型、交易に用いられた南蛮の壺、中国皇帝の使者である冊封使の行列図が配してあり、周辺の国々とのはなやかな関係がうかがえます。

しかし、1609年の島津氏の侵攻によって、状況は一変します。琉球は薩摩の支配下にありながらも中国との進貢関係は続けていくという両属の状態におかれました。幕府との関係を示す「江戸上り行列図」はこの変化をよくみてとれます。





近世琉球のコーナーに展示されている書画・陶器・漆器・織物・三線などは、文化の多彩さを示しています。それまでの中国や日本、南方との交流の中で開花したものです。

明治政府の琉球処分（明治12年）により、沖縄は近代日本の国家に組み込まれました。さる大戦では沖縄は唯一の地上戦がおこなわれたところです。戦後、27年間の米軍統治下にあえぐ沖縄の姿は、展示されている琉球政府時代の印鑑やパスポート、B型軍票や米ドルにあらわされています。

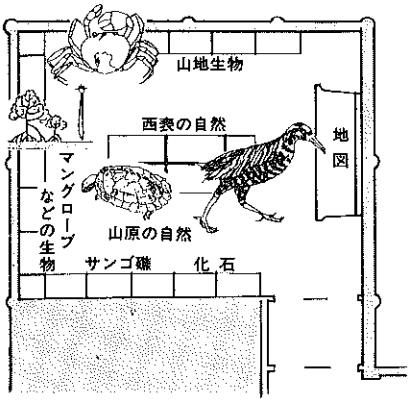
このように、沖縄は大きな歴史的変動をたびたび経験してきました。琉球史は「中世日本の外国」といわれるように、日本史の枠組みではとらえきれない面を数多くもっています。その点は近世琉球から現代の沖縄についても同じです。日本の中の外国史とでもいうべき琉球史の「顔」を、展示の中でどのように表現するか今後とも重要な課題の一つです。

〈展示解説シリーズ〉

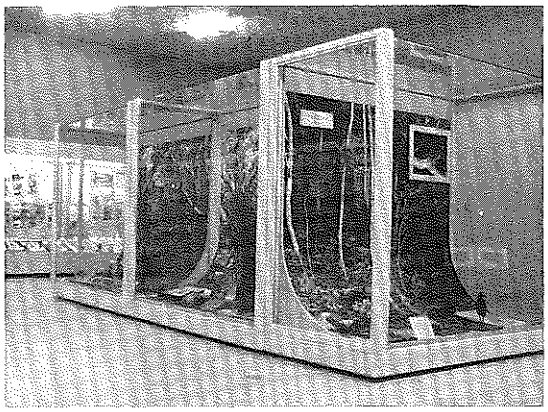
自然史室へおいでよ（自然史室探検①）

自然史室の展示は、沖縄の島々の成り立ちから始まります。島々の歴史を知る手がかりはアンモナイトやハロビア、シカ、ゾウ、イノシシなどの化石です。展示されている化石は、沖縄の島々が約2億年以上の時間をかけてできあがったことを教えてくれます。

それから展示は、珊瑚礁の生物、磯の生物、砂浜の生物、マングローブの生物、集落とその周辺の生物、低地の生物、鍾乳洞の動物、河川の生物、山地の生物というテーマで続いていきます。展示室を時計回りに見学すると、海から山地にかけての様々な環境にくらす生きものたちの様子を知ることができます。



中央にあるケースには、山原（沖縄島北部のこと）と、西表島について展示してあります。山原や西表島の山地は、イリモオテヤマネコやノグチゲラなど、沖縄の珍しい動物たちの大切なすみ場所なのです。また特別展示コーナーでは、ヤンバルクイナについて紹介しています。



展示のまとめは、出入口近くにある大きな壁地図です。九州の端から台湾に至るまでの地域が示され、沖縄が島国であることがすぐ分かります。このことは、沖縄の自然を考える上でたいへん重要なポイントです。例えば島をとり囲む海は、外敵の侵入をくいとめる障害となります。そのため沖縄の島々には、他の場所では絶滅してしまった動物、いわゆる「生きた化石」と呼ばれる動物がたくさん生き残ることができました。また沖縄の動物や植物には、島ごとに少しずつ違っているものが多数あります。これも元々は同じ種類だっのが、別々の島に離ればなれになり、それぞれの島の状況に合わせて生活していくうちに少しずつ変化したからだと考えられています。

このように沖縄の島々には、多くの貴重な動物、珍しい動物たちがすんでいます。そして本土では見ることのできない独特の自然があります。自然史室は、沖縄の自然について、いろいろな発見を探すことができる場所なのです。

博物館 文化講座あんない

第205回 展示解説会

壺屋の陶工

（9月21日(土) 午後2：30～）

講 師：平良邦夫 氏
（沖縄県工芸産業振興審議委員会副会長）

第206回 特別講演

アジア音楽のコスモロジー

（10月15日(火) 午後2：00～）

講 師：藤井知昭 氏
（国立民族学博物館教授）

第207回

首里城物語

（11月16日(土) 午後2：30～）

講 師：真栄平房敬 氏
（那覇市文化財審議委員）

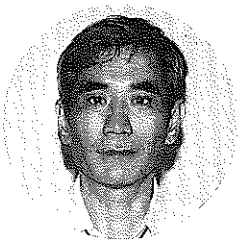
第208回 収蔵品解説会

沖縄の文様

（12月21日(土) 午後2：30～）

講 師：翁長自修 氏
（琉球大学教育学部美術工芸科教授）

ニューフェイス

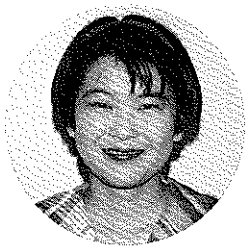


大城将保

オオシロ　マサヤスです。この度の異動で、県教育庁文化課から当館学芸課長として赴任致しました。生涯学習社会への移行期である今日、博物館が社会教育施設としてその責務を十二分に果たせるよう、頑張りたいと思います。どうぞよろしく！

荻尾俊章

ハギオ　トシアキです。私は高校の教師として那覇高4年、具志川商業高4カ月を経て、去年の8月1日付けで当館の歴史担当の学芸員として赴任いたしました。沖縄の歴史の研究は勿論のこと、博物館を通して沖縄の歴史を教えていける学校教育との連携にも頑張りたいと思います。どうぞよろしく！



西江幸枝

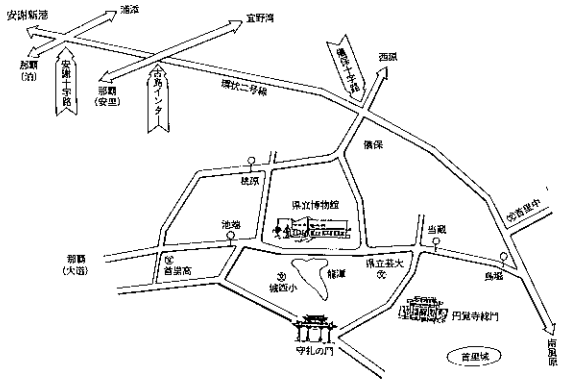
ニシエ　ユキエです。私は、県教育庁総務課から異動してまいりました。当館では庶務課に属します。郷土文化の香り高い古都首里城のほとりで仕事ができることを幸に思います。頑張ります。どうぞよろしく！

平成3年9月21日発行　〒903 那覇市首里大中町1－1　Tel.（098）884－2243．886－4353

〈バス路線〉

○那覇交通（銀バス）の利用

（那覇市内線）・⑫末吉線 ⑬牧志線 ⑭石嶺線　池端又は当蔵下車 徒歩2分

（市　外　線）・㉕石川線 ㉝西原線 ㊲琉大線　桃原下車 徒歩5分

○東陽バス　・⑥⑨（浦添市屋富祖←→与那原）
儀保又は鳥堀下車徒歩10分